

石井亮一にとってのキリスト教信仰
—入信経緯と信仰生活およびそれらを支えたキリスト者コミュニティー—
Christianity for Ryoichi Ishii
—The Christian Community That Supported Him Becoming a
Christian and Living a Holy Life —

山崎晃史
YAMAZAKI Koji

Abstract

Ryoichi Ishii is famous for founding Takinogawa Gakuen that was the first school for children with intellectual disabilities in modern Japan (Meiji period). This study analyzes how he became a Christian and clarifies the characteristics of his life of faith. The factors that led him to become a Christian are as follows: (1) Ryoichi started to carefully explore Christianity after learning the concept of “sinner” from senior Christian students. (2) He was greatly influenced by the students’ community of the college (Rikkyo University). (3) Encounter with Bishop C. M. Williams was rather an indirect influence on him becoming a Christian. The characteristics of his life of faith are described as follows: (1) He practiced in faithful response to Jesus’ words of “Just as you did it to one of the least of these who are members of my family, you did it to me.” (2) He cherished daily worship services in the chapel. (3) His faith and practice were supported by the bonds of the Christian community. In conclusion, Ryoichi’s total trust in God was led and supported by the Christian community more than that was previously believed.

キーワード：石井亮一，滝乃川学園，ウイリアムズ主教，キリスト教，信仰と実践

Keywords: Ryoichi Ishii, Takinogawa Gakuen, Bishop C. M. Williams, Christianity, faith and practice

1. はじめに

石井亮一（1867-1937）（以下、「亮一」とする）は、明治期に孤児救済事業に熱心に取り組む中で知的障害児教育の必要性に目覚め、自らが設立した滝乃川学園¹を通じて日本におけるその礎を築いた人物である。その実践はキリスト教信仰を強固な基盤にしていることが特徴であるが、知的障害児童の教育と福祉の先駆者としての歴史的位置づけが進んできた反面、信仰の側面にはあまり光が当たっていない。

亮一のキリスト教との出会いは立教大学校（現在の立教大学）への入学から始まり、在学中に洗礼²を受けている。同大学は、米国聖公会³の宣教師ウイリアムズ主教⁴が設立した。主教は学内で起居し、その無私の行動から多くの学生に人格的感化を与えたとされている。そこで、亮一についても伝記的記述の多くは「ウイリアムズ主教の感化を受けた」

と説明している。しかし、入信に至る経過については記録も証言も極めて限られており、裏付ける具体的な資料がないのが実際である。

亮一の信仰面を正面から描き探究した主な文献、論文には以下のようなものがある。河尾（1993, 2002）は亮一とその妻石井筆子（以下、「筆子」とする）の信仰が、滝乃川学園の事業展開の基盤となっていたことをまとめている。「いとちいさきものになしたるは、われになしたるなり」⁵ という聖書の言葉に依拠して温かく愛をもって知的障害をもつ人を包むのが、亮一の信条、福祉実践だったと指摘している。津曲（2008）はそれまでの亮一に関する諸資料の究明を総合して、その個人史を、根拠が確かめられる範囲のなかで簡潔にまとめている。そのなかで、受洗に至る内面の変化過程は不明であることを示唆している。しかし、亮一の人生が「愛と信仰と希望の生涯」だったと総括し、キリスト教信仰抜きには語れないことを示している。滝乃川学園他編（2011a, 2011b）の「滝乃川学園百二十年史」に収集された資料からは、亮一と学園コミュニティの信仰の姿が垣間見られる。学園の保母の証言や施設の運営状況から、学園での全人的生活教育がそのコミュニティの信仰生活や礼拝と一体的だったことが分かるのである。河尾（2014）は、亮一と筆子の信仰と実践の関係を広く深く分析している。亮一の信仰については、知的障害教育・福祉事業を日本に定礎する力を発揮する源泉であったこと、世間の評価に苦しめられる必要はないと教えるものであったこと、自己の無能非力を自覚させ神に事業を委ねるものであったこと、を指摘している。つまり、神の峻厳さの前に自らの罪深さと向き合いつつ、神の愛に全幅の信頼を置き運命を委ねるといふ、両面を統合した亮一の信仰（とそれに基づく実践）の姿に言及している。

本論は、以上の先行文献・論文を基盤にしつつ、亮一の青年期までの人間形成史やパーソナリティと照らし合わせながら、キリスト教入信を促した要因やその過程について分析し、信仰生活の特徴を明らかにする。結果として、それらに信仰コミュニティが果たした役割の大きさに気づかされるだろう。

2. 前提となる歴史的背景

2.1 キリスト教拡大に寄与した信仰の原理

キリスト教は、世界の創世から終局までの単線的歴史を前提とし、神が常に創造を続けていることを前提としている。太祖アブラハム以降のイスラエルの民と神との契約の時代を経て、イエスの死と復活を通じて全人類に関係する神との新しい契約が始まったとする。その新しい契約は、神が人を無償で愛するように、人も神を愛しお互いに愛する、というアガペー（agape）すなわち「神の愛」を根本原理としている。それは、本質的に慈善事業への旺盛なモチベーションにつながり、弱者救済に大きな役割を果たすことになった。ローマ帝国の一地方のそれほど目立たぬ一群の動きから始まったキリスト教は、その原動力により地縁血縁共同体を越えた絆を広げていったと考えられる（Stark, R. 1996）。

2.2 明治政府の欧化政策とキリスト教宣教

日本におけるキリスト教宣教はカトリック修道会イエズス会のフランシスコ・ザビエル（Francisco Xavier）による鹿児島上陸に始まる（1549年）。日本宣教は一時緒に就いたように見えたが、弾圧が始まり、ついに江戸幕府はキリスト教を禁止（1612年）し鎖国を進

めた。これによりカトリックは公然と活動できなくなり、一部の潜伏信者の共同体（隠れキリシタン）以外には信仰は継承されなかった。

約 200 年後、日本は外国の圧力に抗することができず、日米和親条約（1854 年）以降は開国に向かった。その後の明治新政府は、欧米諸国に互するべく天皇を中心とした近代国家体制を目指すこととなる。欧米との不平等条約締結を余儀なくされていた政府は、明治初期の時点ではその状態から脱却すべく文化と国家の欧米化を目指した。いわゆる欧化政策である。キリスト教禁教も表面上は 1873 年（明治 6 年）には解除され（切支丹禁制の高札撤去）、欧米のキリスト教各教派は宣教師を続々と日本に派遣した。キリスト教は一時、欧米文化の象徴としてむしろ歓迎された。幕末に幕府側に立っていたいわゆる佐幕派の士族階級の知識人が、キリスト教に活路を見いだそうとしたということも言われる。実際、新渡戸稲造、内村鑑三など初期の日本のキリスト教指導者には士族出身の者が多い。そうでなくとも、社会の激変期に当たりキリスト教に期待を持つ人々は多く、信者は増加した。

その後、1880 年代後半には欧化政策の反動で国粹主義が台頭し、天皇崇拝の土台の上に諸宗教があるとす国家体制がより明確になり、キリスト教宣教には逆風となった。亮一がキリスト教に入信した（1887 年）のは、ちょうどそのような時期だった。しかし、既に神学校での聖職者養成やキリスト教による教育事業、慈善事業が各地で展開されており、キリスト教のコミュニティは自律的に機能しつつあった。

3. 石井亮一の生涯とパーソナリティ

3.1 人間形成と開拓的教育実践活動

亮一本人は自叙伝を残しておらず、自己については多くを語っていない⁶。

滝乃川学園（1986a）の「石井亮一傳」によれば、亮一は佐賀藩鍋島家の家臣石井家に生まれている（1867 年慶応 3 年）。彼が「清廉硬直古武士の風骨をそなえられたる」とし、それが厳父の性格を引き継いだものとしている。幼少期のエピソードとしては、道で「五六歳の頃より大學論語など習い覚えて暗誦」して唱え、往来の人々が賞賛していたというものが紹介されている。しかし、生来虚弱で父が心配し、石井家で暮らしたままの形で医師の大須賀家の養子となった。以来 1898 年に復籍するまで大須賀姓であった。

佐賀中学校に入学し、寮生活で健康状態は良くなる。また、最初は邦文科だったが英文科設置に伴い転籍した。進取の気性に富んでいる姿が垣間見られ、この頃から西洋文化に触れ始めていただろう。

そして、成績優秀で鍋島家の奨学生に選抜され工部大学校（東京大学工学部の前身）を志望し上京（1883 年明治 16 年）するが、「体格検査」で落ちるという想定外の出来事が生じる。その際、急遽、志望を変更し、米国コロンビア大学で応用化学を専攻すべく、その準備のため築地にあった立教大学校に入学した（1884 年 5 月）。奨学金は辞退したという。このあたりの経緯は定かではないが、英語や西洋学問の教授を看板にしていた設立間もない立教大学校に着目し、渡航準備のための有意義な時間を持つとしたのだろう。この出来事を人間形成上の第一の転機と捉えたい。

大学在学中の姿として同級生の小林彦五郎は、「級中の優等生で、其時分から研究心が強かった」と証言している（小林, 1937）。海老沢編（1974, p. 188）によれば、立教大学校に関して、外国人による外国的な教育に偏っているとして、他の学生や併設の三一神学校

学生と共に、改革に向けた交渉を大学と行い、基本的には主張が通ることになる。また、後に詳しく取り上げるが在学中にキリスト教の洗礼を受けている（1887年4月10日）。これにより第二の転機を迎えた。

大学を卒業した亮一は、計画通り留学の手続きを進めたが、健康状態から留学に適さないとの判断を受けてしまった。進路での二度目の挫折を味わうことになったのである。夢が絶たれた亮一ではあったが、これが、結果的には職業的な召命をもたらす決定的な転機となった。立教女学校の改革を期待され教頭に就任（1890年明治23年）したのである。大学在学中の学校改革交渉の実績が買われたことによるが、自身も女子教育の道に使命を感じ奮起したようである。なお、大学在学時代に立教女学校の英語添削教師として関わっていたという伏線もあった。この出来事は第三の転機と捉えたい。

二度の挫折で相当のダメージを受けたはずであるが、それによる苦悩や停滞を伺わせる記録や証言はなく、むしろ、一気に天職に導かれていった感がある。

立教女学校では亮一が改革に多大な貢献をした。その後、ウイリアムズ主教が主導した孤児救済事業（東京教育院：1892～1894年解散）にも関わり始める。その設立の主意書は亮一と同僚の小宮珠子との連名で作成され、孤児を救済する必要性を切々と訴えている。

1891年10月、数名を受け入れて事業を開始したまさにその半月後の10月28日に濃尾地震が起き、岐阜、愛知を中心に死者7000名以上という多大な被害が生じた。親を失う児童が多数生じ、そのなかでも女兒が醜業者に売られるという事態が生じ、危機感を覚えたキリスト教系の諸団体はその救済に当たった。亮一も、急遽、関係者と話し合い、分担して児童を引き取ることにした。その際、50名を受け入れたいと考えたが収容する場がないという現実があった。

孤児かつ女兒という当時の社会で二重に不利な条件をもつ者の、将来の自立を期すことが必要と感じた亮一は、女学雑誌⁷を主宰していたキリスト者巖本善治と共に祈った。そして、私費を投じて個人事業として新たに「孤女学院」を始める決意をした。この日のこの決意が第四の転機であり、同年の12月1日だとされる⁸。無謀だと止めようとした大学同級生の早川喜四郎に対して、「神は僕に彼等を引取りて教育する事を命じ給ふたのだ」と亮一が語ったという（滝乃川学園他編, 2011a, p. 107）。実際には、同年12月30日の2名から始まり、1892年2月には震災孤女を10名以上受け入れた。間借りの仮院舎の時期を経て、1892年4月には滝野川村（現在の東京都北区滝野川）に建物ができ本格的な施設運営が始まった。そして、孤女学院の事業に専念すべく同年立教女学校を辞した。

初期からたびたび運営の危機があった。義捐に頼る方法での運営のため財源が安定せず、従事者も定着しないまま、児童20名に亮一一人で対応するという状況もあった。自身の健康問題や感染症の流行などにも悩まされた。しかし、後に述べるように、その都度多くの人々の助けによって乗り越えている。

ここで、再び大きな転機を迎える。孤女学院の児童の中に知的障害の児童がいたのである⁹。この児童に愛をもって関わる中で成果があり、亮一は知的障害をもつ児童の教育の必要性に思い至った（石井, 1900a）。重度の知的障害は教育不可能とされていたが教育は可能であると考えたのである。そして、養護的な女子教育から知的障害児童の教育へと事業を転換していった。さらに、教育方法の探求を進めるため、米国に渡り最新の知的障害学校の視察や文献研究を行った（1896年, 1898年）。渡米の段取りや渡米先では聖公会の

絆が生かされ、当時の最先端の実践を見ることになった。ここに、最善のものを求めて徹底的に極めようとする姿勢とそれを実行する行動力、および科学的態度を亮一に見ることができる。そして、常に教育者として自負心があった（石井, 1900b）。

こうしたいわば第五の転機を経て、孤女学院は滝乃川学園と改称された（1897年明治30年）。以降、西巢鴨村（1906年明治39年）、谷保村（1928年昭和3年、現国立市）へと移転しつつ、先駆的に保母養成部や児童研究所を併設しながら一貫して開拓的事業を展開したのである。ただし、慢性的な財源不足に加え、火災による園児死亡事故（1920年大正9年）も生じるなかで、事業廃止の危機をぎりぎり乗り越えながらの展開であった。

このような滝乃川学園に触発され、知的障害の領域にも光が当たるようになった。1934年には同様の事業が広がることを願って立ち上げた日本精神薄弱児愛護協会（現在の日本知的障害者福祉協会）の初代会長に亮一が推されることになる（最初は辞退していた）。

滝乃川学園は安定的運営を実現するために1920年に財団法人化された。日本資本主義の父と言われ社会福祉にも力を入れていた渋沢栄一が1921年からその死の1931年まで法人理事長となっている。「石井さんの事業を楽にさせてあげたい」として就任したとされる。当時、キリスト教関係者以外からもその事業が注目されていたことが分かる。

亮一は1937年（昭和12年）の死に至るまで、研究を行いながら最後まで実践を続けた。

3.2 パーソナリティ

明治期前半の社会で高等教育を受ける立場は社会階層的にも能力的にも少数派であり、その点からしても恵まれた境遇と能力的素質を持ち合わせていたのが亮一という人物である。明治維新後の時代精神として、そうしたエリートは、西洋の文化と科学を貪欲に吸収し国に貢献しようとしていた。亮一も新しいものを取り入れようという姿勢があり、西洋の学問に触れ、自らも自然科学で郷里や国への貢献をしようとした（進取の気性）。

また、自然科学への興味からは論理的にもものを考えようとする姿勢を持っていたことが分かる。実際、知的障害をもつ児童の教育を開始する際には、さっそく海外視察で最新知見を吸収し、直感的方法ではなく根拠のある教育方法を取り入れている。その後も、常に科学的態度で教育方法を探求した（論理的思考姿勢）。

多くの若年者が早逝した時代で、亮一も長兄が一七歳で亡くなっている。その長兄に似ているということで三男の亮一が親から寵愛されたと記録されている。しかし虚弱だったことから心配され、自らも健康には不安があったであろう。それに加えて期待を受けながら志望大学に入学できなかったという挫折である。彼はこうした経験から不安や挫折という人間の負の側面への共感能力を獲得していただろう（弱さへの共感性）。河尾（2014, pp.72-73）もその点を指摘している。

さらに、挫折に対しても柔軟な進路変更を行っていることから、精神的復元力の高さが見受けられる（高レジリエンス¹⁰）。のみならず、立教女学校に入職以降、自らの事業を立ち上げるまで1年もかかっておらずその決断力、行動力は注目に値する（機敏な行動力）。新たな気づきを新たな構想につなげていく感受性も相当なものである（気づきの力）。そして、何よりも一時の熱狂ではなく定めた方向性を粘り強く実現していく持続性がこれらの特性を統合している（高いストレス耐性と持続力）。

外面的性格としては、若松賤子の「王子孤女学院訪問記」によれば「たいそう物静かで

ひっこみがちで、教育や宗教について以外は、他人に口数多く話しかけようとなさらないのです」という証言がある（滝乃川学園他編, 2011a, p. 225）。学園の保母などは謹厳な姿を証言している（水谷, 2011, p.1610）。藤本（1937）は伯父である亮一の思い出として、厳しく叱られ気難しい一面があったこと、言葉数が少なかったことと、反面、人に対して寛大で親切、優しくかったことの両面を証言している。

以上をまとめると、家父長的な姿勢を持ちつつ、人に対しては基本的には穏やかで優しくかった。そして、理想主義的でありながら密かな情熱としてそれを内に秘めており、現実の事象に対しては冷静な分析を行い、いざとなると機敏に行動し、困難な状況でも初志を貫く粘り強さをもっていた。そうした人物像が浮かび上がってくる。

4. 石井亮一のキリスト教入信経緯の分析

4.1 キリスト教との出会いと探求

キリスト教信者となったことが亮一の人生を大きく方向づけた。その入信の経緯は従来から「ウイリアムズ主教からの感化」とされる。しかし、この感化とはいかなるものだったのだろうか。残念ながら、亮一もウイリアムズ主教も詳細な証言を残していない。「石井亮一傳」にある伝聞的情報がそのほとんど全てである。それによると、以下のような経緯である（滝乃川学園, 1986a）。

立教大学校に入学した亮一は学内で寄宿舎生活を行うことになった。ミッションスクールゆえ伝道心に燃えた数名の学生がいきなり亮一の部屋に押しかけ、「神よこの罪人を憐れみたまえ」と祈って信仰を迫ったことに対して、「武士的潔癖」の強い亮一は「何だ失敬千萬な、誰が罪を犯した」と内心怒り押し問答した。そして、翌朝には寄宿舎を出てしまい、下宿から大学に通ったとのことである。しかし、探究心の強い亮一はこの問答が気になり、キリスト教を研究し「罪人」のキリスト教的意義を理解し、進んで洗礼を受けるまでになったという。これについて「石井亮一傳」は「一旦の研究何事にも窮めざれば止まざる先生の気象をここにも見るべし」とまとめている。

ウイリアムズ主教との関係については続けて次のように記されている。「此くて其の当時築地に住まわれて広く内外にキリスト教聖者の誉れ高い日本聖公会監督ウイリアムズ師との間に一旦結ばれたる教えの清き師弟の交わりは日を重ね月を経て深まり、その後先生の信仰生活の長き五十年のあいだ先生はほとんど絶対に近き尊敬を表して之に師事」（一部現代仮名づかい等に変換）したとある。いっぽう、ウイリアムズ主教は亮一のことを我が子のごとくに見たという。亮一の病院入院時には、主教が、当時珍しかったアイスクリームを持って訪れ祈祷して慰めたというエピソードが紹介されている。

このように、自らキリスト教を探求し納得するところがあり洗礼を受けた。ウイリアムズ主教との師弟関係は日を重ねて深まった、という説明の流れになっている。

実際、亮一の洗礼は、ウイリアムズ主教やその管理する米国聖公会系の教会により行われたものではなく、同じ聖公会ではあるが英国聖公会の宣教（海外福音伝道協会（SPG））に属する芝の聖アンデレ教会¹¹で行われたことが分かっている。そして、洗礼は状況から見て同教会の司祭が執り行ったと見られる（滝乃川学園他編, 2011a, p. 18）。そうだとすると、キリスト教についての正統教義を伝え亮一の信仰を確かめたのはその司祭ということになる¹²。なお、亮一は洗礼を受けた年の12月にビカステス（E. Bickersteth）主教により、

信仰を確かなものとして確認する儀式である「堅信」を受けている。

大学内の身近なウィリアムズ主教に洗礼準備を依頼しなかったことは謎だとされている。ただ、亮一の下宿先は聖アンデレ教会と地理的に近かった¹³。したがって、単に近い教会を選んで通い、キリスト教について学んだとも考えられる。寄宿舎を飛び出した手前、ウィリアムズ主教に直接教えを請いにくかったのかもしれない。

ただし、大学入学時から洗礼まで約3年を要しており、大学内で起居するウィリアムズ主教のパーソナリティに触れ、その薫陶を長期にわたって受けたはずで、全く影響を受けなかったとは考えにくい。そこでウィリアムズ主教の人物像について整理する。

4.2 ウィリアムズ主教の生きざま

ウィリアムズ主教はその死後日本人関係者から「道を伝えて己を伝えず」¹⁴と評され、その徹底した清貧さが非信者を含めて当時の人々に感銘を与えていた。

ウィリアムズ (C. M. Williams) は 1829 年にリッチモンド市で第五子として生まれる。熱心な米国聖公会信徒一家だった。ウィリアム・メリー大学を経てバージニア聖公会神学校 (1852-1855 頃) に進学し聖職を目指した。当時の中国伝道への取り組みに影響を受け、同級生リギンズと共に海外伝道に志願した。卒業後、聖職となり、1855 年に上海に向かい、中国語の学習を粘り強く進め、中国語での説教も可能になり伝道を敢行した。1859 年 (安政 6 年) に日本開国近しとの情報から日本への宣教師となり、中国伝道教区の主教管轄下、リギンズと同時期に長崎に上陸した。自由に居住はできず、中国人の黄檗宗の寺であった崇福寺広徳院に居住させられた。禁教下であり宣教活動はできず、外国人居留者のための礼拝を行いながら、情報収集、日本語学習、礼拝式文の日本語訳など、宣教の準備を忍耐強く慎重に進めた。日本の禁教令撤廃に向けては積極的に動き、外交圧力について米国大統領などに直接進言し、米国聖公会にも、米国政府への働きかけを促していた。1866 年によく日本人 1 名に洗礼をほどこした後、いったん米国に戻り、1868 年、あらためて中国・日本伝道主教として上海に着任した。1869 年 (明治 2 年) からは大阪に移住し伝道を開始する。1870 年代からは私塾や慈善事業を始め、洗礼を受ける日本人が出始める。

1873 年 (明治 6 年) にキリシタン禁制の高札の撤去が行われ、それも相まって東京を拠点に宣教することになり移住する。1874 年には日本専任の主教となり日本伝道に専念することになる。この年には築地居留地に私塾 (立教学校から立教大学へと展開) を開いた。以降、数を増した宣教師と共に活動し、日本人信者を増やしていく¹⁵。そのなかから聖職者を養成し、徐々に日本人がミッションに加わっていくことになる。

1877 年には深川三一教会、神田基督教会を建立し、東京三一神学校を設立して聖職養成への布石を打った (日本聖公会東京教区ホームページ)。また、関東各地へ積極的に伝道を行い、信者が増えていった。ここから主教を辞任する 1889 年までの時期は、各所で礼拝を司式し、学校で講義を行い、聖公会の諸ミッション団体を調整し、翻訳を行い、事業を監督し、トラブルを仲裁し、財務管理を行い、日本聖公会の成立に向けて調整と準備を行うという多様な役割をこなす激務で、しかも退任までほとんど休みなく働いた。

主教退任後は、一伝道者として関西の伝道に尽くした。既存の教会などを管理しながら東奔西走し、何カ所も拠点を新設した。その後、老体のため活動が難しくなり、祈りで日本に貢献するとして 1908 年に米国に帰郷し、1910 年に亡くなった (立教大学立教学院史

資料センター編, 2007, pp. 6-25)。

人物像であるが、生涯を独身ですごし文字通り神のために生きたと言える人物で、無欲無私だった。自らの名前が残ることを恐れ、署名入りの書物を出したがらず、自らに関する美談の記事について削除するように要請したエピソードがあり、自らの墓標は小さな十字架のみとするように求めた。所持品はほとんどなく、ボロボロでつぎはぎの服を着ていた。自らにはお金を使わず、食事は粗食で、冬も暖房を使わない。その風貌から「乞食」と間違われることがあったと伝えられている。聖職としての俸給のほとんどは慈善事業への寄付や教会堂の建設などに当てられ、亮一も寄付を受けて助けられている。

学校の寄宿舎で陽当たりの悪さを訴えた学生に対し、何も言わずに自らの部屋と交換して用意し、その事実気づいて恐縮する学生に、学生は長い時間学習しなければならないので良い環境を欲するのは当然、とにこやかに答えたというエピソードが残されている(大江, 2000, p. 679)。また、最初期の東京伝道で、若い宣教師たちが、狭すぎ、暖房のある部屋が限られ学習ができないことを訴えると、ホテルに移してくれたが、彼らがウィリアムズ主教の宿を訪問すると、火鉢と寝具のみの小部屋に泊まっていた、と驚愕するエピソードが残されている(大江, 2000, p. 411)。

その倫理性は聖僧として人々に評価されていた。地方伝道先では、偶然すれちがった土地の人が「神様のようなかたが通られました」と評したというエピソードも残されており、孤高の存在感を示していた。

大江(2000, pp. 714-725)によれば、ウィリアムズ主教の神学傾向は福音主義的¹⁶ではあったが、二重予定説を信奉する原理的なカルヴァン主義¹⁷ではなかった。むしろ、神の恵みとそれに対する人間の自由意志による応答という両方を大事にするバランスの取れたものであった。聖公会内の多様な神学的傾向のグループと実務的な調整ができるふところの深さもあった。

また大江(2000, pp. 754-755)は次のように指摘している。ウィリアムズには、冷静な分析判断と健全さを逸脱しない積極果敢な伝道意欲の併存(静と動)、立場が異なる人と組織の中で調停的役割(配慮と権威)、一見愚なる風貌と倫理的威圧感(神と乞食)、自己否定的な生きざまの貫徹と優れた実務手腕(聖と賢)、神の道を伝えるが自らは伝えない(顕示と黙示)というさまざまな逆説的側面があり、それを見事に統合していた。

亮一も、こうしたウィリアムズ主教の生きざまに接して、一目を置いていたに違いないし、人間的魅力を強く感じたに違いない。それでも、科学的態度を身につけていた亮一にとっては、師への熱狂的心酔ではなく、キリスト教の中身の納得感こそ重要であったろう。ただし、後で見ると、亮一の周囲の少なからぬ人がウィリアムズ主教に惹きつけられ、影響を受けていたのであり、慕う人々のつながりのなかにいたのである。

4.3 学生コミュニティの影響

亮一が信仰を得るに当たって、大学コミュニティでの人間的絆も重要だったことが推測される。早川喜四郎、小林彦五郎、杉浦貞二郎、岩佐琢蔵という学生、および同一の場で学び授業が共通していた東京三一神学校の名出保太郎、杉浦義道、皆川晃雄といった学生間の絆が強く、既に記した大学の改革運動を進めたのもこれら8人である(海老沢編, 1974, p. 188)。これらの学生は、卒業後、聖公会の司祭や神学者、キリスト教系学校の教職とし

て顕著な活躍を見せた非凡な集団であり、当時からキリスト教的価値観を共有しつつあったと考えられる。

早川喜四郎（1865-1943）は後に司祭となり、教会の牧師として働いた後、聖公会系の平安女学院の院長を務めた。松平は（2017, pp. 3-4）は、早川について、その地域の当時のタッカー主教が「教区内で最も有能な日本人聖職者の一人で、聖ヨハネ教会での長い司牧期間中に若者を教会に引きつけることに非常に成功しました」とした回想録の部分を紹介している。この早川ら数名の学生が亮一に対して例の「罪人」の祈りをしたとされる（津曲, 2008, p. 28）。

小林彦五郎（1867-1944）は大阪の聖公会系の英和学舎を経て、受洗後に立教に入っており、後に司祭となり、さらに立教女学校校長となり 40 年間同校を率いた。また、立教大学教授を務めた（日本聖公会歴史編集委員会編, 1974, pp. 259-261）。

杉浦貞二郎（1870-1947）は兄義道を頼り立教大学校に入学し、兄の影響とウィリアムズ主教の感化を受けて師より洗礼を受けた。これが 1887 年 4 月とされるので亮一と全く同時期の受洗である。後に神学者となり、聖公会信徒として立教大学学長を務めた（日本聖公会歴史編集委員会編, 1974, p. 165）。

岩佐琢蔵（1870-1946）はウィリアムズ主教の感化により洗礼を受け、立教女学校教員、フェリス女学院教頭（ここでは学校立て直しに尽力した）、立教大学学監を務めた。理路整然とした弁舌と生真面目な教会生活で知られた（日本聖公会歴史編集委員会編, 1974, pp. 257-259）。立教大学予科ではウィリアムズ主教の事績を情熱的に語ったとされる（鈴木他編, 2020, p. 95）。

名出保太郎（1866-1945）は和歌山で小学校教員をしていたが、同地方への伝道から影響を受け洗礼を受けた（1885 年）。大阪に出て神学校で学び、その後、東京三一神学校で学び 1890 年に卒業しており、亮一と学生の時期が重なっている。上京後、神田基督教会で小橋勝之助や林歌子という後に亮一とも関係が生じる者と共に活動を行っている。教会の自給と福音の伝道を持論とし、日本聖公会大阪教区の初代主教を務めた（日本聖公会歴史編集委員会編, 1974, pp. 135-137）。

杉浦義道（1864-1930）は立教学校在学中の 1881 年にウィリアムズ主教の感化を受けて洗礼を受け、いったん大阪の神学校や医学校に転ずるなどした後に、立教学校復学を経て東京三一神学校を 1890 年に卒業する。そして、司祭となり、その後労働者への伝道に取り組み、労働者矯風会を興し、貧者の更生に力を尽くした（日本聖公会歴史編集委員会編, 1974, pp. 163-165）。

皆川晃雄（1864-1952）は小学校教員をしていたが、ウィリアムズ主教の高潔な人格にうたれて洗礼を受け（1884 年）、伝道を志し、東京三一神学校に学んだ。在学中の 1891 年には聖職者である執事になっている。その後司祭となり教会牧師として働いた。ウィリアムズ主教の影響で福音主義的であった（日本聖公会歴史編集委員会編, 1974, pp. 171-172）。

これらの仲間、亮一の事業を陰に陽に助けていくことになる。小林彦五郎は財団法人化後の滝乃川学園の理事を務め、小林彦五郎と杉浦義道は交代で滝乃川学園での礼拝を受け持った。石井亮一・筆子記念館の米川覚館長によれば（2022 年 8 月 8 日滝乃川学園にて聞き取り）、この 8 人は同じ並び方での写真を節目毎に残しており、絆の深さが窺えるという（その写真と解説：米川, 2022, pp.12-13）。

小林彦五郎と名出保太郎は亮一の葬儀に出席している（「人道」50号, p.3の記事）。また小林彦五郎は亮一逝去後に「特に親密の関係」にある友人として追悼文を出している（小林, 1937）。

なお、皆川晃雄は後に滝乃川学園理事長となる渋沢栄一の飛鳥山邸を訪れて、1910年から1913年にかけて、聖書講読会を数十回行っている（公益財団法人渋沢栄一記念財団「デジタル版『渋沢栄一伝記資料』」）。渋沢栄一はキリスト教信仰には至らなかったが、関心を持っていたことが分かる。また、皆川晃雄を通してここで間接的につながっていたことは興味深い。

鈴木（2007, pp. 10-13）が指摘しているように、こうした学生同士の絆が生まれたのも、ウィリアムズ主教が将来の聖職者を生み出すために、カレッジの形式で全人教育を行うことを構想したことが効いている。カレッジとは教員と学生が起居を共にし、幅広い教養を身につけていく教育である。立教大学校は人格的交流を通じてお互いを高め合う全人教育を目指すものであった。ウィリアムズ主教もチャプレンとして住み込んでいたのである。そのねらいが、亮一と同時期に学んだ学生の間で顕著に結実したと言える。

ウィリアムズ主教とその感化を受けた学生、キリスト教信仰を既に得ていた学生を含んだこの学生コミュニティがお互いに影響を及ぼし合い、学び合い、絆を深めていくなかで、亮一も自然と信仰にいざなわれていったのではないか。

4.4 入信経緯の分析

以上 4.1 から 4.3, および亮一の生い立ちやパーソナリティを総合すると、入信の経過については以下のような仮説を想定することができる。

亮一は、幼少期からの身体の虚弱さや挫折体験により弱い立場の人への共感感受性を備えていた。また、進取の気性に富んでおり、社会のなかで何か意味ある役割を果たしたかった。科学領域に進もうとしていたように、合理的、論理的な思考になじんでいた。そのようななか、大学入学と共に触れたキリスト教信仰の内容が気になり探求を始めた。「罪人」の概念にひっかかるものがあったのである。学生生活でウィリアムズ主教の教えや人格に触れ、他の学生との絆が深まるにつれ、当初は抵抗のあったキリスト教にも接近していった。下宿に近い芝の聖アンデレ教会に通い、キリスト教について学んだ。人間は罪や弱さをもつが、神に愛されている、その愛に応えていくのがキリスト教信仰だということに納得感を抱き、同教会で洗礼および堅信を受けた。ウィリアムズ主教はそれを事後に知ることになったが、その後、師弟関係を強めていった。

信仰への実存的決断としては、探求の結果の納得が基盤にあると考えられるが、それを支えた学生どうしの絆が大きかったと考えられる。多くの学生がウィリアムズ主教の感化を受けており、それがコミュニティを通じて亮一に間接的に影響を与えたとも言える。

5. 石井亮一の信仰生活の特徴

5.1 「最も小さな者」への関わり

亮一が折に触れ強調していたのがマタイによる福音書 25 章にある「この最も小さな者の一人にしたのは、すなわち、私にしたのである」の句に従うことであった。実際、「最も小さな者」を求めて、「女子」の教育に関わり、さらに弱い立場である「孤女」の教育

へと向かい、さらに社会から放置されてきた「知的障害をもつ児童」の教育へと辿り着いた。その姿勢は徹底しており信仰と実践を一体化させる核となる句だった。

学園で養成された保母の羽生はる子は、この句は「先生がいつも何かのお話によくお引き遊ばされました」と証言し（滝乃川学園, 1986b, pp. 406-407）、同じく水谷登美もこの句が「園に働く保母のすべての血となり肉になって」いたと証言している（水谷, 2011, p. 1623）。

1901年（明治34年）に行ったという「いと小さきもの—前学園長の訓話—」と題された亮一の滝乃川学園における訓話の採録からは以下のような趣旨が読み取れる（滝乃川学園, 1986b, pp.386-388）。要約する。

「人に対する親切は報いを求めがちであるが、それは真の親切とは言えない。しかし、人とはそういうものである。世の人は名誉のために行動する。私たちが模範とするのは清浄無垢のキリストであり、良い行いをしたからといって誇るべきではない。私たちの理想はキリストに一致合体し、清くあり、愛に富んだ姿となることである。キリストの愛は敵をも愛する完全なものなのである。キリストは「兄弟のいと小さきもの—一人に行ったことはすなわち私に行ったことである」と宣べた。私たちが人に尽くすのは単に人に尽くすのではなく、神になすことなのである。キリストへの恩返しなのである。愛の負債を消却しているのだという思いでいけば遂には敵をも愛せるようになる。敵を愛することもまたキリストを愛することだからである。（抄）」

ここでは、神の愛およびキリストの恩に応える¹⁸ことを強調している。ウィリアムズ主教がその神学的立場から神の恵みに対する人間の応答を強調していたことの影響があるかもしれない。その応答は最も小さな者に関わることを通して実践されたわけである。ウィリアムズ主教自身が慈善事業に熱心であったし、例えば同窓生の杉浦義道が司祭となった後に生活困窮者の支援をしたように、亮一の周辺で共有された行動原理が「最も小さな者」に関わることであった¹⁹。

藤本（1937, p. 59）は間近で見ていた伯父である亮一について「伯父の一生は「十字架の道」であつた。己を空しくして、神と人ともに奉仕された一生であつた」（原文ママ）と回顧している。

5.2 日々の公禱（礼拝）の重視

亮一は個人的な自由祈禱のみならず、公禱（礼拝）を大事にした。朝夕と日曜日の礼拝を皆で共にすることを重視したのである。そのための礼拝堂は滝野川の時代から設けられ、1898年には滝野川聖三一教会として聖公会から認可され、学園の精神的な支柱となった（滝乃川学園他編, 2011a, p. 381）。必然的にチャプレン（聖職者）も配されることになる。亮一が、礼拝堂で行われる日々の礼拝を「日用の糧」として心より愛した、と「石井亮一傳」にも記されている（滝乃川学園, 1986a, p. 94）。

谷保（国立市）に移転する際には礼拝堂は各寮の中心位置に設置された。毎朝、学園関係者が皆で共同の礼拝を行い、神前に心魂を清めその一日を神に聖別し、その後各自スガスガしい気持ちで一日の任務を行う、夕には再び礼拝堂に集い終日の天祐を感謝して安息を祈って一日を終わる、そのために礼拝堂が中心に存在している、と「石井亮一傳」は説明している（滝乃川学園, 1986a, p. 95）。

学園の元保母の証言から、保母たちに信仰は強制されず礼拝出席は自由であったことが

分かる。そうであっても礼拝の雰囲気が好きで出席していたとある保母は述べている（水谷他, 1974, p.38）。ここからも学園の公禱を中心にした信仰生活スタイルが読み取れる。つまり、一過性の熱狂的な祈りや信仰を重視するのではなく、生活の一コマとして組み込まれた礼拝を重視しているのである。亮一はこの生活を50年にわたり絶やさず続けた。この静かで篤い信仰の土台の上に、科学的精神に基づき、粘り強い実践が展開された。

5.3 信仰コミュニティの絆

5.3.1 交流の拡大

学生コミュニティの同窓生としてのネットワークが卒業後も維持されたことは先に述べた。そこからさらに、女子教育や孤児救済事業等の実践を媒介に、教派を超えてキリスト者どうしの交流が大きく広がった。イエスの弟子であるという同志の意識がお互いを結びつけ、そのネットワークへの帰属意識がお互いの支え合えを促すことになった。河尾(2014, p.76)も亮一の姿を取り上げ、「信仰的实践は、それが本物であればあるほど、信仰同志の公私共なる連帯を強化する働きがある」と述べている。なお、明治期キリスト者の気質として、少数派でありながら新しい価値観を世間に広げていこうとする自負心と熱気が特に強かったことが、ますますお互いを結びつけただろう。

ここでは孤女学院から滝乃川学園初期の時期に亮一とその事業を直接助けた、あるいはつながりを持った著名なキリスト者をたどる。

5.3.2 立教女学校の教師たち 小宮珠子・林歌子など

そもそも亮一が立教女学校で働くことになったのも、同校の小宮珠子の推薦による（滝乃川学園他編, 2011a, p. 25）。小宮珠子（1845-1928）は神田基督教会で洗礼を受け、ウィリアムズ主教を慕っていたとされる。教会の日曜礼拝に欠かさず通う祈りの人であった。晩年は知人の住所録を見ながら一人ひとりのために祈ったという（日本聖公会歴史編集委員会編, 1974, pp. 261-263）。1880年より立教女学校の教師となり、その後幹事として欧米風ではない日本の教育に向けて改革を志した（そこに亮一が加わった）。そして同校で長きにわたり女子教育に献身した。また、既述の通り、ウィリアムズ主教が始めた養護施設である東京救育院を同校拠点に亮一と共に運営した同志である。孤女学院に向けた義捐活動の呼びかけにも名を連ねるなどして亮一を助けた。

立教女学校では林歌子も教えており同僚となった。林歌子（1865-1946）は男兄弟のいない家庭で育ち、家を背負う意識を背景に自立心が養われて、郷里で教師の道に進んだ。ところが離婚を経験し、わが子も早くに亡くし、上京して立教女学校の教師の職を得た。当初はキリスト教と距離を置いていたがウィリアムズ主教の説教を聞いて納得するところがあり、1887年に同師から洗礼を受けた。神田基督教会で、博愛社を興すことになる小橋勝之助と出会い、同世代の青年男女と信仰面で刺激し合い高めあった（佐々木, 1999）。その後、請われて博愛社に転じた。さらに、基督教婦人矯風会大阪支部を立ち上げ、同会の会頭にもなり社会運動、特に廃娼運動を進めた。その人生は精神的な傷を負いながらも、信仰を核に弱い立場の人に寄り添おうとするもので、社会事業家であり社会活動家だった。「最も小さな者」へのまなざしは亮一と共通しており、自身も信仰の同志のなかで支えられていた。そして、初期の孤女学院をたびたび手伝っており（滝乃川学園ら編, 2011a, p.

212) , 義捐物品を提供している。

さらに、学生コミュニティを亮一と共有した名出保太郎と結婚することになる松原昱子も立教女学校で同僚であった。上記の女性たちは学校の改革に際して毎朝 5 時に起きて教会で熱心に祈ったとされる（日本聖公会歴史編集委員会編, 1974, p. 262）。

5.3.3 石井筆子

亮一が困難な事業を継続できたのは石井筆子(1861-1944)という人物がいたからである。後に亮一の妻となる筆子は 1861 年(文久元年)生まれ、大村藩士の渡辺家出身であり、10 代の頃から英語塾に学び、聖書にも触れていた。早くから英語を使いこなした。ヨーロッパでの生活も経験した。1884 年に許婚の小鹿島果と結婚し、1886 年に長女が生まれるも障害があった(1897 年から滝乃川学園で生活するようになり 1916 年 30 歳で亡くなった。次女は早逝、1891 年に三女が生まれるも 1898 年に亡くなる)。その年に長女と共にウィリアムズ主教から洗礼を受けている。そのとき教母(洗礼の証人の役割)として立ち会ったのが津田梅子である(滝乃川学園他編, 2011b, p. 1754)。

この頃からフランス語教師として華族女学校²⁰に携わるようになり、聖公会系の静修女学校の校長を 1895 年から 1899 年まで務めた。その生徒を連れて孤女学院を支援したこともある。1892 年に夫を亡くし、1894 年頃亮一と初めて出会い、孤女学院の支援を行い始めた。1895 年頃、亮一が静修女学校の講師となったことで、筆子が長女の障害のことを相談するようになり協力関係ができていったとされる。そのようななかで筆子は、女子教育、弱い立場にある者の教育に専心し亮一を助けようと決意し、安心して教育活動を共同して行うためにも結婚の道を模索した。亮一は独身を貫くつもりであったが、その意思を受け入れていった。亮一自身大須賀姓から石井姓に復籍して準備を進めたが、両家からの反対があった。亮一がキリスト者であり慈善事業を行う者であることから、宗教上の理由と共に彼女の社会的地位が失われることを、筆子の親は特に恐れた。しかし、筆子は意思を貫き、反対を説得しついに 1903 年に結婚することになる。

1920 年に学園で火災が起き、園児が 6 名死亡した大事故の際には二人は学園閉鎖を決意したが、筆子が貞明皇后のかつてのフランス語教師であったつながりから、そのお見舞いを受け、是非事業を継続するようとの内旨があり、奮起することになったとされる。亮一の死後は第二代の学園長を務めた(津曲, 2001)。

筆子は、子どもの障害や死、夫の死を経て「最も小さな者」へのまなざしを持っていた。そして、信仰と価値観を共有する同志として、並々ならぬ決意で亮一と滝乃川学園のために生きようと志した。亮一の信仰と実践に惹きつけられ、華々しい社交界での活躍を置いて、事業運営の協力者として自ら困難な壁を取り除いて飛び込んだのである。その才覚や教育者としての経験と能力、そして人脈がなければ滝乃川学園の発展は制約されていたであろう²¹。信仰が結びつけた絆と言える。

5.3.4 津田梅子

後に女子英学塾(現津田塾大学)を設立した津田梅子(1864-1929)は、1871 年 6 歳で岩倉使節団の一員として渡米した。米国人家庭で育ち、1873 年に自ら望んで洗礼を受け 1882 年に帰国。再度の米国留学を経て華族女学校の教師となった。同校で筆子と同僚であり、

女子教育の同志として、また筆子の洗礼に立ち合った信仰の同志として、静修女学校経営や亮一の事業に関わり始めた筆子を心配しながら見守っていた（滝乃川学園他編, 2011a, pp.398-400）。その結婚問題にも心を痛めていた（滝乃川学園他編, 2011a, pp.285-286）。孤女学院の財源確保のための「孤女学院特別資本」（1894年）の発起人としても筆子などと共に名を連ねている（滝乃川学園他編, 2011a, p. 150）。

筆子を支え、筆子の活動に協力することを通じて亮一をも支えていたと言える。

5.3.5 巖本善治・若松賤子

キリスト者である巖本善治（1863-1942）は、キリスト教精神に基づく明治女学校で1887年から教頭、その後、校長を務め亮一とは女子教育の同志であった。また、キリスト教色の啓蒙的女性誌である「女学雑誌」を主宰していたが、立教女学校の改革以降の初期の亮一の働きを同誌で繰り返し取り上げて後押しした。孤女学院設立に際しては、亮一の「決意信念」を報じ、「稀なる美談」だとして、その趣旨が「孤女の教育」であることのユニークさを伝えている（巖本編, 1891）。その後、孤女学院が亮一の私費を投じて王子の滝野川に新築されることを伝え、義捐の必要性を訴え、「孤女学院設立の告白」と題する亮一の文章を掲載している（巖本編, 1892）（大須賀, 1892）。また、知的障害をもつ児童の教育に取り組み始めていること（巖本編, 1894）、滝乃川学園への名称変更（巖本編, 1897）、その他のさまざまな動きについて逐一記事で追っている。滝乃川学園他編（2011a, p. 223）は「石井亮一と滝乃川学園を世に知らせた功績は大である」としている。情報媒体が限られていた時代に亮一の活動を積極的に取り上げたことで、早くから広く知られるようになり、その義捐活動にも大きな役割を果たした。

そして、既に述べたように巖本善治は孤女学院設立の決意の際の亮一の祈りに立ち会ったとされる。滝乃川学園のチャプレンを務めた山縣雄杜三が、亮一から直接受けた1936年の手紙でそのことを明かされたことを報告している（山縣, 1940）。これは亮一の人生を決定的なものとした極めて重要な祈りの場面であり、それだけ信仰を分かち合っていたことが分かる。

また、河尾（2014, pp. 75-76）によれば、その妻でキリスト者、教育者、翻訳者である若松賤子（巖本嘉志子：1864-1896）は、孤女学院の運営に取り組む初期の亮一を心配し、その信仰を励ました。夫婦共々かなりの支えをしていたのである。

5.3.6 島崎藤村

キリスト者で後に文豪と呼ばれることになる島崎藤村（春樹）（1872-1943）は、明治女学校の教師となったばかりの1892年、学園での伝染病流行に際して数日支援に入った（滝乃川学園他編, 2011a, p. 212）。この年には寄付もしている（滝乃川学園他編, 2011a, p. 230）。

5.3.7 志方之善・荻野吟子

キリスト者で後に牧師となる志方之善（1864-1905）は、濃尾地震による孤女を亮一に代わり引き取って東京に連れてきており、設立直後の孤女学院で大きな役割を果たしている。妻で日本初の女医であるキリスト者の荻野吟子（1851-1913）と共に孤女学院に寄付をしている。また、孤女学院が滝野川村に定着する前の仮開院の場として急遽、荻野吟子の荻野

医院内に児童を収容したことが分かっている。この場所で明治女学校や立教女学校の学生がボランティアをして世話をしつつ、荻野吟子自身も児童の治療や世話をしたとされる。これらは志方之善がキリスト教の理想郷建設を志して北海道に渡る（1891年）直前のことである（滝乃川学園他編, 2011a, pp. 227-228）。

5.3.8 キリスト教慈善事業の先駆者たち

日本の孤児救済事業（養護施設）として最初期の取り組みである「岡山孤児院」を創始したキリスト者の石井十次（1865-1914）とは、亮一は濃尾地震における孤児救済に関わった際に直接会っており、その運営手法を学んでいる。神が良しとされたものならば必要な金品は自ずと集まるという信念に基づく、一般人からの寄付や独自事業に依拠した運営方法を学んでいる。

また、立教女学校時代の亮一は博愛社の小橋勝之助（1863-1893）と手紙でやりとりしている。濃尾地震後の孤児救済に関して連携し、小橋勝之助も孤女学院を訪ねている。小橋勝之助は神田基督教会でウイリアムズ主教と出会い洗礼を受け、1890年に兵庫県赤穂郡矢野村で貧困児童や孤児などの教育事業を行う博愛社を始めた。病気で余命を意識したため既述の通り林歌子と呼び寄せた。その際、亮一にもその意思を伝えている。そして、1893年に29歳で逝去した。大月（2014）は小橋勝之助の手紙による交流（林歌子、松原昱子、石井十次、巖本善治などの名が見られる）を取り上げ、その活動が地方のものであったが「キリスト教界を中心とする全国の人的ネットワークに支えられていたことがわかる」と述べている。このことは滝乃川学園（孤女学院）にも同様に当てはまる。林歌子と小橋勝之助、林歌子と亮一、亮一と小橋勝之助と信仰と交流が重なり合っていることから、信仰を介した重層的なネットワークがあったと考えることができる。

さらに、キリスト者で矯正教育の先駆者である留岡幸助（1864-1934）も亮一による知的障害教育の開始に注目し「大須賀亮一君の白痴教育」という題で1897年の基督教新聞721号で取り上げている（留岡, 1978）。そこでは、まだ面識はないものの、知的障害教育に熱心だと聞いて喜んでいたが、知的障害教育部門を設置すると聞いて強く支持しお祝いするという趣旨のことを述べている。また、キリスト者による慈善事業が広がってほしいことも述べている。このように、信仰と実践の同志として留岡幸助が亮一のことを注目していたことが分かる。

なお、キリスト者の内村鑑三（1861-1930）は米国での体験を元に、知的障害をもつ児童の教育の必要性を早くから訴えており²²、亮一との交流も伝えられている（滝乃川学園他編, 2011a, p. 249）。

5.3.9 神の愛を核とした支え合い

このように、キリスト者で女子教育や慈善事業に名を残す多くの人々と亮一に接点があった。その一人ひとりを詳しく見ると、例外なく並々ならぬ決意や信念で非妥協的に活動をしていたことが分かる。その真剣さがお互いを強く結びつけていたと言える。また、ウイリアムズ主教を強く慕っている人も散見され、同じ師への思いが相互の絆をさらに強めただろう。

なお、教会関係者をはじめ、有名無名の多くの人々が関心や寄付を寄せることで自発的

に亮一の信仰と実践を支えていたことも忘れてはならない。

亮一を含め諸活動に散る同志たちは財源不足、人員不足の困難な状況にあっても、孤立はしなかったと考えられる。このいわば信仰コミュニティは神の愛を核とした支え合いそのものだった。亮一の信仰と実践もそれによって力を得ていたのである。

6. まとめ

亮一は知的障害をもつ児童の教育・福祉の先駆者であること、キリスト者であることが記憶されてきた。その信仰についてはウィリアムズ主教の影響、信仰の篤さ、敬虔さ、事業開始に至る神の前での実存的決断の劇的な側面が強調されてきた。また、滝乃川学園が多くの人々の支えによって成り立ってきたことが今までも指摘されてきた。

いっぽう、亮一がどう自覚していたかにかかわらず、その人生を俯瞰して見ることができる現在、その信仰はキリスト者のコミュニティの絆により促され支えられていたことをさらに指摘しなければならない。これまで見てきたように亮一の信仰はその内面で完結したものではなく、信仰コミュニティのなかに顕れているのである。入信までの経過についても、学生コミュニティからの影響のもと、キリスト教探求の結果としての納得によるものが大きく、ウィリアムズ主教からの影響はまだ直接的ではなかった可能性がある。

キリスト教信仰には個人の内面における神との出会いや、そこでの悔い改め、 sacrament(儀式)に際して臨在する復活のイエスを実感すること等々さまざまな側面があるが、隣人を自ら進んで愛すること、神の愛「アガペー」の原理に基づく隣人、弱者、病人、犯罪者等への無私的愛他的実践も信仰の重要な核心である。明治期の日本においてキリスト教が宣教される過程で、慈善事業、教育事業が広がったのはそれが同教の本質だからであった。アガペーを巡る信仰は必然的に社会的実践と表裏一体となる。そして、他者への関わりが本質であるために、人々の絆が強まり広がっていく。

亮一はイエスの愛に応えることを信仰の中核とし、「最も小さな者」に関わり、隣人を愛することを愚直に実践しようとした。滝乃川学園の実践はその信仰と一体のものであった。そして、亮一を含む信仰コミュニティも信仰と実践を媒介に広がったものであり、そのなかでお互いに支え合ったのだった。

最終的に、その支え合いが可視化されたものが滝乃川学園の礼拝堂およびそこでの公禱であった。礼拝は亮一にとっても学園に関わる全ての人にとっても、日々を支える糧だったのである。

注

1 石井亮一が私費を投じて始めた孤女救済事業かつ教育事業である「孤女学院」に端を発している(1891年)。1897年に知的障害をもつ児童の教育事業への本格的な取り組みを期して滝乃川学園と改称した。現在も東京都国立市において知的障害福祉の諸事業を継続している。

2 洗礼は「聖霊の働きによって、わたしたちがキリストの死と復活にあずかり、新しく生まれるための聖奠」(聖奠=目に見えない霊の恵みの、目に見えるしるしまたは保証)(日本聖公会, 1991, pp.262-263)であり、キリスト教各教派共通してこれが「入信」としての意味をもつ儀式である。したがって、洗礼を受ける=受洗=入信という関係である。

3 Episcopal Church in the United States of America。英国聖公会（Church of England）から全世界に広がったローマ・カトリック教会とプロテスタント教会の中道に位置する教会である Anglican Church の連合体である Anglican Communion の一員である。なお、亮一も属した日本聖公会は米国聖公会と英国聖公会、カナダ聖公会の宣教を通じて、日本人自身による教会を目指して 1887 年に設立され、Anglican Communion の一員である。

4 Channing Moore Williams（1829-1910）は米国リッチモンド出身。バージニア神学校在学中に海外伝道を決意し、卒業後司祭となり、米国聖公会伝道協会の中国への派遣宣教師となった。幕末日本に渡来（1859 年）した最早期のプロテスタント宣教師の一人である。1866 年に中国・日本伝道主教（監督）となった。

5 マタイ福音書第 25 章 40 節の語句。日本聖書協会共同訳では「この最も小さな者の一人にしたのは、すなわち、私にしたのである。」となっている。本論では引用文献の表現に合わせている。ここはイエスが仮想の物語を題材に、飢えた者に食べさせ、渴いている者に飲ませ、よそ者に宿を貸し、着るものがない者に着物を与え、病気の者を世話し、投獄された者を訪ねるといふこと自体が、神にしたことに等しい、という教えを語っている部分である。

6 亮一は敬愛するウイリアムズ主教の、自らを誇示しない謙遜な姿に倣っていると考えられる。そこで、他者の証言や状況からの推測を用いてその姿に接近せざるを得ない。なかでも、亮一の死後数年後の昭和 15 年（1940 年）に滝乃川学園により刊行され、妻の筆子の証言が含まれている「石井亮一傳」、および諸研究を総合して書かれた津曲（2008）の「シリーズ福祉に生きる 51 石井亮一」、諸資料を集成した「滝乃川学園百二十年史」が重要な基礎資料となる。本論も特に断りのない部分はこれらの文献に依拠して亮一の姿を構成している。

7 キリスト教の理念に基づく 1885 年創刊の女性向け啓蒙誌。近代的家族観の導入を啓発し、男女平等、女子教育の普及などを主張していた。「文学界」誌の母体となった。

8 この日が滝乃川学園の設立日と見なされている。単なる施設収容ではなく将来の自立に向けた教育として捉えていたことが独創的である。

9 濃尾地震の際に収容した中にいた児童であり「太田徳代」という名前が伝えられている。

10 レジリエンスは **resilience** が原語。復元力という意味であり、困難な状況にあっても平時の心理状態に回復する力。その力が高いことが高レジリエンス。

11 同教会は日本聖公会東京教区主教座聖堂として現在も当時と同じ場所、港区芝公園で存続している。

12 海外福音伝道協会（SPG）の神学傾向からすると、同教会では礼拝や聖餐式が重視されていたと考えられ、後の亮一の信仰生活のスタイルにも何らかの影響を与えたかもしれない。

13 芝区西久保桜川町（津曲, 2008, p. 29）だがこれは現在の虎ノ門あたりであり教会とは 2km 以内である。

14 1913 年に日本聖公会有志が追慕碑をウイリアムズ主教の墓地に建立した。そこに記された句で、50 年にわたる日本での献身に感謝した文章中にあり、その生涯を最も的確に表現した言葉であるとされる（大江 2000, P. 691）。

15 ウイリアムズ主教による記録によれば 1874 年から 76 年で受洗者 14 人（大江, 2000, p.

420)。

16 「福音主義」にはさまざまな意味が含まれるが、本論では聖公会内の「ロー・チャーチ」の立場を示すものとして使う。信仰のみというプロテスタントの主張、つまり個人の回心や聖化を重視し、礼拝も簡素さを求める立場である。

17 カルヴァン (Jean Calvin, 1509-1564) は宗教改革の流れの中で、神の絶対的主権を強調し、人間ひとり一人の救いと滅びは、人間の努力によらず予め定められているという二重予定説を唱えた。「カルヴァン主義」とはそうした神学とそれに基づく信仰生活のあり方のことである。

18 亮一が幼少期から触れてきた儒教的な報恩の思想が影響しているかもしれない。なお、明治期のキリスト者と二宮尊徳の報徳思想 (徳 (恵み) を使って社会に役立てていく) には親和性があった。内村鑑三はその著書「代表的日本人」のなかで二宮尊徳を取り上げているし、キリスト教基盤の啓蒙誌「女学雑誌」でも特集されているし、同時代のキリスト者社会事業家留岡幸助も二宮尊徳を模範としている。

19 この行動原理は新約聖書で繰り返し示されている一連の隣人愛の理念と一体的である。小林 (1937) は、生前の亮一がローマ信徒への手紙第 13 章の「互いに愛し合うことのほかは、だれに対しても借りがあつてはなりません」を挙げて「僕はこの御言葉の実行に努めている」と私に語ったことがあると回想している。

20 華族 (それまでの大名や公家) のための女子教育機関として、明治政府によって 1885 年に設立された。学習院女子大学の源流。ここで筆子は 1897 年まで教師であった。また、津田梅子と同僚となり、皇族とのつながりができた。

21 例えば、校長を任された静修女学校が筆子の有能な運営と人脈により生徒数が安定し成功しているとの当時の関係者の報告が残っており (滝乃川学園ら編, 2011a, pp.395-396), その才覚が垣間見られる。

22 内村鑑三は米国の知的障害施設で看護人の仕事を体験した。1894 年に発表された「流竄録」にはその知的障害教育についての報告がある。留岡幸助も「大須賀亮一君の白痴教育」でこれを取り上げている。そして亮一をその内村に続く人物としている。

引用文献

- 海老沢有道 (立教学院百年史編纂委員会) 編 (1974) 『立教学院百年史』立教学院
- 藤本克己 (1937) 「亡き伯父の想ひ出」『社会事業』第 21 巻第 4 号, 55-59.
- 石井亮一 (1900a) 「白痴教育に就て」『基督教週報』第 2 巻第 10 号, 5-6.
- 石井亮一 (1900b) 「白痴教育に就て (承前)」『基督教週報』第 2 巻第 11 号, 4-6.
- 巖本善治編 (1891) 「社説 孤女院の設立一大須賀亮一君の決意信念一」『女學雑誌』第 294 号, 1-4.
- 巖本善治編 (1892) 「社説 孤女學院」『女學雑誌』第 301 号, 1.
- 巖本善治編 (1894) 「孤女學院の女學」『女學雑誌』第 402 号, 2-4.
- 巖本善治編 (1897) 「孤女學院名稱を改む」『女學雑誌』第 436 号, 3-4.
- 河尾豊司 (1993) 「石井亮一・筆子夫妻の生涯と思想—「いと小さき者」として「いと小さき者」と共に「いと小さき者」の為に—」『社会事業史研究』第 21 号, 1-20.
- 河尾豊司 (2002) 「知的障害者福祉施設創設者の生涯と思想 (石井亮一・筆子) / 教育的

- 保護の展開—滝乃川学園の歩みについて—高橋幸三郎編『知的障害をもつ人の地域生活支援ハンドブック』, 164-185., ミネルヴァ書房
- 河尾豊司 (2014) 「石井亮一・筆子の信仰と実践—「人の人たる神聖」「人の人たる人権」「白痴」—」『社会事業史研究』第 46 号, 65-91.
- 小林彦五郎 (1937) 「石井亮一君の追憶」『人道』第 50 号, 2.
- 公益財団法人渋沢栄一記念財団「デジタル版『渋沢栄一伝記資料』第 57 巻本文」
https://eiichi.shibusawa.or.jp/denkishiryu/digital/main/index.php?DK570071k_text
(2023 年 1 月 31 日取得)
- 松平信久 (2017) 「佐々木順三の信徒像とキリスト教研究—邦, 二郎, 順三三兄弟の信仰歴と併せて—」『キリスト教教育研究』第 35 号, 1-22.
- 水谷登美・安藤春・吉田久一・一番ヶ瀬康子 (1974) 「現代社会事業史の証言(3)—滝野川学園元保母に聞く—」『社会福祉研究』(財団法人鉄道弘済会) 第 14 号, 30-39.
- 水谷登美 (2011) 「学園と共なる半生」『滝乃川学園百二十年史—知的障害者教育・福祉の歩み—下』, 1600-1631., 大空社
- 日本聖公会歴史編集委員会編 (1974) 『あかしびとたち—日本聖公会人物史—』日本聖公会出版事業部
- 日本聖公会 (1991) 『祈祷書』
- 日本聖公会東京教区ホームページ「東京教区について—東京教区草創期のあゆみ—」
<https://www.nskk.org/tokyo/about> (2023 年 1 月 31 日取得)
- 大江満 (2000) 『宣教師ウイリアムズの伝道と生涯—幕末・明治米国聖公会の軌跡—』刀水書房
- 大須賀亮一 (1892) 「孤女學院設立の告白」『女學雑誌』第 301 号, 2-3.
- 大月英雄 (2014) 「設立期の博愛社を支えた人びと—「交友手牋」に見る村尾よしの人物像—」『博愛社史研究会編『大阪「博愛社」の研究—125 年の歴史的検証 (1) —』平成 25 年度～平成 27 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C)) 研究成果報告書』, 1-10.
- 立教大学立教学院史資料センター編 (2007) 『立教大学の歴史』立教大学
- 佐々木恭子 (1999) 『シリーズ福祉に生きる 33 林歌子』大空社
- Stark, R. (1996). *The Rise of Christianity*. Princeton University Press, Princeton, NJ / 邦訳: ロドニー・スターク, 穂田信子訳 (2014) 『キリスト教とローマ帝国—小さなメシア運動が帝国に広がった理由—』新教出版社
- 鈴木範久 (2007) 「立教大学校とカレッジ教育」『立教学院史研究』第 5 号, 2-16.
- 鈴木範久監修・日本キリスト教歴史大事典編集委員会編 (2020) 『日本キリスト教歴史人名事典』教文館
- 滝乃川学園 (1986a) 「石井亮一傳」『石井亮一と瀧乃川学園—石井亮一没後 50 周年記念復刻版—』11-109., 社会福祉法人滝乃川学園
- 滝乃川学園 (1986b) 「瀧乃川学園のその日その日—創立五十周年記念特輯號—」『石井亮一と瀧乃川学園—石井亮一没後 50 周年記念復刻版—』383-429., 社会福祉法人滝乃川学園
- 滝乃川学園・津曲裕次編 (2011a) 『滝乃川学園百二十年史—知的障害者教育・福祉の歩み

一上』大空社

滝乃川学園・津曲裕次編（2011b）『滝乃川学園百二十年史—知的障害者教育・福祉の歩み—
一下』大空社

留岡幸助・同志社大学人文科学研究所編（1978）「大須賀亮一君の白痴教育」『留岡幸助
著作集第一巻』203-205., 同朋舎

津曲裕次（2001）『シリーズ福祉に生きる 49 石井筆子』大空社

津曲裕次（2008）『シリーズ福祉に生きる 51 石井亮一』大空社

山縣雄杜三（1940）「視よ、彼は祈りをるなり」『基督教週報』第 80 卷, 15 号, 2.

米川覚（2022）「米川館長の歴史さかのぼり」『矢川だより』第 127 号, 12-13., 滝乃川学
園